

# メルロ・ポンティの『行動の構造』における 「意識」の多義性と「統合」について

小 熊 正 久  
(哲学)

序

- §1 「意識」の多義性
- §2 素朴的意識から批判主義への途
- §3 絶対的意識の問題性
- §4 超越論的態度。「意識」の捉え直しの課題
- §5 〈水平の局在と垂直の局在の交叉〉と統合
- §6 統合・弁証法・意識
- §7 〈パースペクティブ的知覚の意識〉と〈意味の意識〉

序

メルロ・ポンティの処女作『行動の構造』<sup>(1)</sup>は、最終頁に書かれている記録によると1938年に執筆され、1942年に公刊された。そして1945年に学位論文の副論文として主論文『知覚の現象学』<sup>(2)</sup>とともに提出された。『行動の構造』の主題は、その書名から受けがちな印象とは異なり、「意識と自然の関係」である。この書物は、「われわれの目的は意識と自然——有機的、心理的、あるいはさらに社会的な自然——との関係を理解することである(J21/F1)」という言葉で始まっているのである。メルロ・ポンティが「意識と自然の関係」を問題にしたのは、当時のフランスの思想家のあいだでは、カントの流れをくむ批判主義的な「全自然を意識の面前で構成される客体的統一とする哲学」と「有機体と意識を實在の二つの秩序として扱い、その相互関係においてはそれらを〈結果〉や〈原因〉として扱う諸科学(J23/F2)」とが併存しており、この二つの立場が対立したままになっていたからである。「意識」の概念を取り上げて言えば、前者では〈全自然を構成するもの〉、後者では〈自然内の一種の事実〉として、相反する理解がなされているわけである。

メルロ・ポンティが、こうした問題をはらむ「意識と自然との関係」を扱うにあたって「行動」の概念を手がかりとしたのは、それが「心的なもの」と「生理的なもの」との古典的区別にあた

いして中立的であり、したがってそういった区別を改めて定義しなおす機会をわれわれに与えるものだから(J23/F2)」であった。この構想により、同書の半ばほどまでは、〈反射学〉の再検討や〈有機体と環境についての生理学的研究〉についての検討が中心となっており、その叙述を受けて後半部において、当初の「意識と自然の関係」という問題が表立って追求されることになる。そこでは当然、「意識」の概念が中心問題となっているが、メルロ・ポンティの叙述は、有機体の環境へのかかわり、知覚や行動の現象学的記述、また、心と身体の関係の問題、世界に対する哲学的諸態度などといった、様々な関連においてなされており、それぞれの文脈において「意識」という語に付加されている形容詞も様々である。それらの用語の関連は一目瞭然というわけではなく、それぞれの文脈での「意識」の意味を理解することは容易なことではない。

けれども、「意識」の多義性は、身体の機能を成立させている「統合」に関連しており、その観点から整理されうるように思われる。そしてこの観点から「意識」の多義性を明らかにしなければ、『行動の構造』におけるメルロ・ポンティの「意識と自然の関係」についての思想もわれわれにとって不明のままにとどまると思われるのである。『知覚の現象学』に比して『行動の構造』は注目される度合いが少なかったが、『知覚の現象学』以降の彼の思想を明確化するためにも、「意識と自然の関係」を「統合」と関連させて考察する作業は不可欠である。たとえば、「キアスム（交叉配列）」という概念は『見えるものと見えないもの』<sup>(3)</sup>の主要概念の一つであるが、その萌芽ともいえる「交叉 *entrecroisement*」や「交錯 *entrelacement*」という概念はすでにこの処女作の中で「統合」との関連で枢要な位置を占めているのである。また近年、認知科学の展開にもなつて考察されるべき問題として注目されている〈生理学的分析と現象学的分析の関係〉<sup>(4)</sup>を考察するためにも、『行動の構造』の再検討は重要な意義をもつことであろう。まさしくこの著作は、上の両方の分析を関連づけることによって人間全体の理解を目指した著作なのである。

## §1 「意識」の多義性

『行動の構造』は4章からなる。全体を一瞥しておこう。第一章【反射行動】は、古典的な反射学説による「反射行動」の研究を批判的に考察した上で、ゲシュタルト学説による反射の解釈を紹介し、「ゲシュタルト」の概念の重要性を述べている。第二章【高等な行動】は、(反射行動よりも)高等な行動についてのバヴロフの実験的研究を批判し、行動の「中枢領域と機能局在の問題」を扱ったのち、有機体の行動を〈有機体と環境との関係の仕方〉という見地から、「癒合的形態」、「可換的形態」、「象徴的形態」の三つのタイプに分けて考察している。第三章は【物理的秩序、生命的秩序、人間的秩序】という表題であるが、のちの考察と関係

するかぎりでは表題の意味をみておこう。ある物体や有機体が、その置かれている状況と反応の関連において、「その各点に起こることは、他のあらゆる点に起こっていることによって決定されている(J196/F141-2)」というような系をなしている場合に、メルロ・ポンティはその状態を「秩序 *ordre*」という概念で表現しており、その諸部分相互の関係の仕方ないし外部との関係の仕方に応じて、「秩序」を「物理的秩序」、「生命的秩序」、「人間的秩序」に分類している。そして「人間的秩序」に関しては、人間と環境との関係を「意識 *conscience*」という言葉を使って考察している。最後の第四章では、以前の論述と問題設定を受けて、その章の表題でもある【心身の関係と知覚的意識の問題】を考察することによって全体を結んでいる。

先に触れたように、序論における問題設定の箇所を除けば、「意識」の問題が明示的に扱われるのは、第三章の第三節【人間的秩序】が最初である。そして、第三節の最終項【結論——これまでの分析の二重の意味。この分析は、批判主義的結論を認めるのであろうか】(J273/F199)において、第三章の総括がおこなわれている<sup>(5)</sup>。その際「意識」に関しては、「〈普遍的な場としての意識①<sup>(6)</sup>〉と〈従属する諸弁証法に根ざした意識②〉との関係はいかなるものであろうか」という問題が提示されており、この問題は次の第四章全体に関連することとなる。だが、ここで述べられている「意識」のそれぞれの意味も、問題設定の眼目も、この言葉だけで直ちに明らかであるとは言い難い。そこで、上の問題を正確に把握するために、最初に、第三章第三節において「意識」がどのような文脈の中で扱われてきたのかを、「意識」という語の多様な意味を整理しながら、たどっておくことにしよう。

第三章第三節の第一項は【意識の生】と題されている。そこでは、まず、「物理的秩序」における〈物理的系と外部との関係〉や「生命的秩序」における〈有機体(動物)とその環境の関係〉とは異なり、「人間的秩序」における人間と環境との関係においては、「人間の労働(*travail*)」が第三の弁証法を開始する(J241/F175)」と言われている。ここで「弁証法 *dialectique*」という語が使用されているが、この語は同書では先に見た「秩序」とほぼ同義であり、〈或る系が環境との関連で部分的にはなく全体として変化する〉関係——またその変化は、環境から系への影響が系のその時々状態にも依存する「循環的關係」である——を表している。また、人間と環境との独特の関係を表現するために、ヘーゲルの用語「労働」が使われているのだが、「労働」は「人間と物理—化学的刺激との間に《使用物》…や《文化物》…など、人間固有の環境を構成して行動の新しい連環(サイクル)を出現させるようなものを投入する(J241/F175)」活動と解されている。彼はこのような意味での「労働」の中に、意識と行為の「内的交流(J244/F177)」を探ろうとしているのである。その際、メルロ・ポンティはベルグソンやブランシュヴィックに言及して、一般に現代の哲学は「意識を行為に結びつけ」ようとしてはいるが、それを達成しておらず、ブランシュヴィックなどの考察にしたがうと「意

識は、思考対象の所有ないし自己自身への透明性として定義され、行為は相互に外的な一連の出来事として定義される(J244/F177-8)」ことになる、と従来の意識概念を批判する。ここでは、批判されるべき概念としてではあるが、「思考対象の所有ないし自己自身への透明性③」という「意識」概念が提示されていることに注意しよう。

この「意識」の概念に対して、メルロ・ポンティは「知覚の記述的諸性格から出発して(J247/F179)」意識の構造を追求しようとしている。その際最初に着目しているのは、「初発段階」(幼児期)の知覚の有様であり、それは「意識の原初的生④」とよばれている。その特徴は、「自然的対象やその純粋な性質をねらうよりはむしろ人間の志向を目指す」ということであり、「自然的対象や純粋な性質をねらう」ような「真理の意識⑤」はそこから生成するものと位置づけられている(J247/F180)。なお、メルロ・ポンティも認めているように、「意識の原初的生④」は幼児期にのみ見られるわけではなく、誤認のないように注意しているような場合を別にすれば、成人の知覚における通常の状態でもあると言ってよい。

「意識」についての伝統的見解によれば、意識にはアプリアリな構造と経験的内容、また、「感覚のモザイク」と「経験を組織化する機能」をもつ意識による意味づけ」という区分があると想定されているが、そうした区分は「意識の原初的な生④」にとっては存在しない。たとえば、他者の表情の知覚において、前もって与えられた感覚的要素にもとづいて表情の意味が把握されるのではなくて、「われわれは目や髪の色を知らず、口や顔の形を知らなくても完全に表情を認めうるのであり」、「それらのいわゆる要素は表情に寄与するかぎりにおいてしか現前しない」。また、メルロ・ポンティは行動と一体になった知覚の有様を、フットボール競技者の例を使って印象的に記している。競技者にとって、グラウンドは「対象」ではない。競技者はグラウンドと一体になり、「目標」の方向を、自分自身の身体の垂直や水平の方向と同じくらい直接に感ずる。その際、競技者にとっての大地はそれぞれの行為がそこで図となって現れうるような地として、潜在的に存在するものであろう。大地の明確な表象も存在しないし、また意図や行動についての明確な表象も存在しない。状況の中で状況に応じて半ば自動的に身体が動くのである。また、スポーツのような場合でなく、日常生活の知覚においても、対象は、純粋な性質をもった自然物というよりは、なされるべき、あるいは、なされうる行為との関連で知覚されているであろう。

この「意識の原初的生④」の記述ののち、意識について「意味的諸志向の束⑥」(ないし「対象へのかかわり」という概念が導入され、「意識の原初的生④」については——ただしこれと同義と思われる「原初的意識」という語ではあるが——次のように言われている。

「原初的意識においても欲望は欲求対象に、意志は意欲対象に、懸念は心配されている対象に関係づけられ、しかもその関係は〈表象〉と〈表象されるもの〉の関係に還元されるものではない(J257/F187)」。

「意識とはむしろ、時には意識自身に明晰な⑦、また時には認識されるのではなく却って生きられるだけのものであるような⑧、意味的諸志向の束⑥なのである(J258/F187)」と。

これらの言葉の中の「表象と表象されるものの関係」とは上で見た「思考対象の所有ないし自己自身への透明性としての意識③」や「真理の意識⑤」と同類のことを指しており、それらは「意識の原初的生④」ならびに「生きられる意識 conscience vécue ⑧」と対比されているとみなしてよいであろう。

さて、次の第三節第二項【本来の人間の意識】の冒頭では「しかし、人間の弁証法はこの〈生きられる意識⑧〉によって尽くされるわけではない(J260/F189)」と言われ、続いて、人間には「観点を選んだり変えたりする能力」が具わっており、それによって、「事実的状况にせまられなくとも、潜在的使用や特に他の道具の作製のために道具を創造するということが人間にとって可能になるのである」と述べられている。また、これに関連して、「労働」という語が再び使われて、「人間の労働の意味は、現実の環境の向こう側に、各自が多くの局面から見ることのできる一つの〈物の世界〉を認め、そして無限な空間・時間を占有するということである」と言われている。われわれは、この「観点を選んだり変えたりする能力」を「真理の認識(J262/F191)」と同類の能力とみて、それを、先ほど言及された「真理の意識⑤」に属する特徴とみなすことができよう。

なお、この項の最後では、「生きられる意識⑧」は、反省的意識ではないという意味で「自己の外部にある意識の生」とも呼ばれて「自己と宇宙についての意識」(⑤に相当)と対照され、さらにこの対照は、ヘーゲル流に「即自的意識」と「即自的かつ対自的意識」と言い換えられてもいる。そして、この二種類の意識の関係については、先ほど見たのと同様に、「しかし、〈宇宙の認識〉はすでに〈生きられた知覚〉の中であらかじめ形成されており、それはちょうどすべての環境の否定がそれらを作り出す労働に中であらかじめ形成されているのと同様である(J262/F191)」と述べられている。ところで、第三章以前の章にも目を向けてみると、上で注目した「観点を選んだり変えたりする能力」は、第二章第三節「行動の構造」の分類に即して言えば、「象徴的形態」の行動の特徴であることは明らかである。その箇所では、「同一主題をさまざまに表現しうるこの可能性すなわち《パースペクティブの多様性》こそが、動物の行動に欠けていたものである。それこそが、行動の中に、認識という行為や自由な行為を導き入れるのである(J184/F133)」と記されていた。

こうした叙述からみても、メルロ・ポンティにとって、認識は行動の一形態として可能になるのであり、行動と密接な関連にあることが理解される。だが第三章の中ではこの関連は主題となっていない。

以上、第三節の第一項と第二項に現れる「意識」の概念を概観してきたが、ここで整理し



ておこう。さきにみた第二項の冒頭の文は一見すると前項には見られなかった意識の要素を導入するもののようにも思えるが、そうではない。第一項において「意味的諸志向の束⑥」としての意識概念が提示されたが、この「束」は、ある場合には「生きられ」、ある場合には「それ自身に明晰である」とされていた。そこで、第一項ではおもに「生きられる意識⑧」の、そして第二項ではおもに「明晰に知られる意識⑦」の特徴づけがなされたといつてよいであろう。なお、⑦は内容上「真理の意識⑤」と同類のもののみならず、以下では⑤を代表として表示する。そして、「本来の人間の意識」という言い方は「真理の意識⑤」と「生きられる意識⑧」の両方をカバーし、「意味的諸志向の束⑥」と同義と考えられる。こうして、③から⑧の意識の概念は3つにまとめられ、「意味的諸志向の束⑥」（ないし「本来の人間の意識」）には⑤と⑧の契機が両方含まれているということになる。

さて、小論冒頭で触れたように、〈第三章結論部〉では「〈普遍的な場としての意識①〉と〈従属する諸弁証法に根ざした意識②〉との関係はいかなるものであろうか」という問いが提出されていた。この問題の意味は以上のことからどのように理解されるであろうか。

「普遍的な場としての意識①」とは、その頁の叙述に即して言えば、自然や生命そして心的なものを対象として見いだす意識ということになるであろう。またこれは、のちに見るように、「批判的観念論」がすべての認識の基盤とみなす「意識」の意義であろう。

他方の「従属する諸弁証法 les dialectiques subordonnées に根ざす意識②」とはどういうことをさすのであろうか。まず先程も見た「弁証法」という語に注目しよう。同じ段落に、「われわれは、…《物的な》ものと《生命的な》ものと《心的な》ものが三つの存在の能力ではなくて三つの弁証法を表すことを認めた」という文がある。しかも、この三つの弁証法は相互に独立なものとはされていない。

「われわれは単に三つの秩序を重ね合わせておくことはできないのであり、それぞれは新しい実体ではなく、先行するものを取り上げ直しと《新たな構造化》と理解されるべきであろう」と述べられている。

そうすると上の②の意識は、物的なものや生命的なものという弁証法の上にその「新たな構造化」として成立する弁証法であると予想されるであろう。

また、秩序間関係については、少し前の箇所であるが、「上級秩序の出現は、その完成の度合いに応じて、下級の秩序からその自律性を奪い、己を構成する各段階に新しい意味を付与するようになる(J268/F195)」と言われており、上級秩序の出現に関しては「統合 intégration」という概念が使われている<sup>(7)</sup>。

以上を念頭において「従属的諸弁証法に根ざす意識②」という語を考えてみる。「根ざす」という言い方は「基づく」という語と同義と考えられるから、これを、「意識以前の弁証法に基づく意識」と言い換えることができよう<sup>(8)</sup>。そうしてみると、「従属的諸弁証法に根ざす意

識②」とそれより「下級の秩序」の関係は「統合」と表現されているが、①と②の関係はその箇所においてはまだ明らかではないことになる。上で見た問題はまさしくこの関係のことを問うていると考えられる。そして、これに関連して、同じ〈第三章結論部〉で次のように述べられている。

「これまでの分析が、上級のものを下級のものから解放すると同時に、上級のものを下級のものに《基づける》という二面をもっていたのは、そのためである。が、この二重の関係こそが、まだ不分明のままであり、したがって今やわれわれの帰結を古典的解答、特に〈批判的観念論〉にたいして位置づけなければならないわけである(J274/F199)」と。つまり、以前と同様の「二重の関係」が①と②の間になりつつかどうかを検討することが、次の第四章の課題とされているのである。

では、この双方の「意識」の意味は、先にわれわれが整理しておいた三つの意識の概念とどうかかわるであろうか。

「普遍的な場としての意識①」の意味は三つのうちのいずれかと完全に合致するわけではないが、「真理の意識⑤」という概念に近いとはいえるであろう。また、②は「生きられる意識⑧」もしくは「意味的諸志向の束⑥」に等しいといえるであろう。そうすると、第三章結論部では、「普遍的な場としての意識①」と「生きられる意識⑧」、あるいは、「普遍的な場としての意識①」と「意味的諸志向の束⑥」の関係が問題になっているといえよう。

『行動の構造』第四章では、「普遍的な場としての意識①」の成立過程が考察され、そのうちに双方の意識概念の関係が問題となる。メルロ・ポンティの叙述の順序に従い、「統合」および「構造化」という概念に注目しつつ、この関係の問題を追っていくことにしよう。

## §2 素朴的意識から批判主義への途

『行動の構造』の最終の第四章は【心身の関係と知覚的意識の問題】と題されている。その第一節【古典的解答】では、上の表題の問題について順番に、問題発生以前の「素朴的意識」の状況、問題の発生、半ばデカルトの思想を継承した関連諸科学（「似而非デカルト主義」と呼ばれている）による扱い方、デカルトの見解、そして「批判主義」による扱い方が提示されている。またこの叙述は、当該問題についての解答は「批判主義」において最高点に達するという見地からなされているが、それは同時に「批判主義」の問題点の指摘ともなっている。小論の前セクションでみた「普遍的な場としての意識①」は、「批判主義」によって前提されている「意識」の概念であり、第三章結論部で提起された二つの意識概念の関係如何という問題を考察する上で、この第一節は重要な箇所である。その叙述をたどっておこう。

われわれはたいいていの場合、知覚や身体の変調がなければ、知覚や身体について反省して

はいない。そうした知覚の状態が「素朴的意識」とよばれ、第一節の第一項ではこの意識にとっての物の知覚的与えられ方（およびそのパースペクティヴ性）と身体の与えられ方が主題となっている。

この「素朴的意識」での物の知覚のされ方についての記述をみよう。

「私がある上で書いている机、また私が今いる部屋、…こういったものは私がそれらについて持っている知覚の〈原因〉として…私に現れるのではない。むしろ私の知覚は、対象をその在る場所に開示し、それまで潜伏していた対象の〈現前〉露わにする光の束の如きものであるように思われる(J276/F200)」。

つまり知覚について、或る物が媒介物を介して感覚器官に影響を与え、それが原因となつてしかじかの知覚が生じるという「知覚の因果説」と言おうような把握はなされておらず、また逆に「意識が対象を構成する」とも考えられていない。この点は、知覚の「パースペクティヴ性」を考慮すると明瞭になる。たとえば灰皿といった物は様々な方向から見られた「パースペクティヴ（局面）」を通して知覚される。その際、

「パースペクティヴは物の主観的変形として私に現れるのではなく、反対に、物の特性の一つ…として現れるのである。まさにこのパースペクティヴのおかげで、〈知覚されているもの〉が、それ自身の中に、隠れた尽きることのない豊かさを持つようになり、まさしく一個の《物》となるのである(J276/F201)」。

こうした与えられ方は、「物は感覚的顕現の彼岸にある」という点で単なる「経験主義的理解」を越え、他方、「物は判断の秩序に属する統一体ではなく、〈現れ〉そのものにおいてすでに〈受肉〉しているのだ」という点で、「主知主義的理解」をも越えるものである(J278/F202)。ここで言及されている「主知主義」とは、多くの感覚的な所与を判断によって総合することによってはじめて一つの客観的な〈物〉の把握が成立するというカント的な思想であるが、メルロ・ポンティは「素朴的意識」においては判断の介入以前に知覚のレベルで〈物〉が成立していると主張しているのである。一言でいえば、「パースペクティヴを通して物を見る」ということのうちに両方の主張の萌芽が含まれているとともに、片方だけを主張することは知覚の実態を歪める、ということになろう。

このように「素朴的意識」が「判断」と区別されているという点からみて、この「素朴的意識」は「意識」の概念としては§1で提示された「生きられる意識⑧」と同義であろう。ただし、この第四章では、のちに見る「反省的ないし批判的な」意識と対比されているために、「素朴的」意識という名称のもとに扱われていると考えられる。

では、「素朴的意識」における〈身体〉の与えられ方はどうであろうか。「私は眼ばたきによって光景にできる〈不断の句切り〉をほとんど意識しない」ように、「身体の媒介というものは、たいていの場合、見逃されている」。身体が存在が気づかれているにしても、「自己の



身体とその諸器官は私の志向の支点ないし媒介者であり続け(J279/F203)」、まだ物的対象や生理学的実在として捉えられているわけではない。

一般に〈主観〉と〈世界〉の関係について言えば、知覚についての懐疑や反省の後に考えられるように、主観は、「〈意識の諸状態〉ないし〈表象〉の世界」の中にいるのでもないし、また、「一種の奇蹟によってそこから外に出て外的事物に働きかけたり、それを認識したりしうのでもない」。主観は、「思考」と「身体」と「延長」がそれぞれ実体としては区別されていないような環境の中で、またさまざまな存在や物や自己の身体との「直接的交渉」の中で生きているのである(J281/F204)。

以上が「素朴的意識」にとっての〈物〉と〈身体〉の与えられ方であるが、次の〈第二項〉では、たとえば身体の不調をきっかけとして、知覚に与えられる事物をそのまま受け入れるのではなく、知覚に対する懐疑や反省をおこなう態度が提示されている。その態度に特に名称が与えられているわけではないが、それは「判断」の作用を含み、「客観的真理」を念頭におく態度であるので、§1の分類にしたがえば「真理の意識⑤」に相当するであろう。

さて、「素朴的意識」において不可分に統一されていた三つの項が、懐疑や反省を経ることによってそれぞれが独立に存在する「精神」、「身体」、「物体」という三つの領域として区別されるにいたる。そうした区別がなされたうえで、知覚という出来事の成立を説明するために、古くは、「身体の中に物の感覚的な姿を運ぶ影像(エイドーラ)」といったものが想定された。けれども、三領域の区別が徹底されたデカルト以来、そのような説明はナンセンスとみなされることになる。というのも、「デカルトにとって光とは一種の運動にすぎないから、身体の外のと、生理学的現象と、心の知覚するものとの間に、いかなる類似性をも仮定する必要はないのである(J284/F206)」。

とはいえ、脳と心は異なる領域とされてはいても、脳を媒介として精神において知覚が成立すると想定する以上、〈脳髄における或る印象〉と〈或る知覚〉との間になんらかの〈規則的対応〉が存在しているように想定されがちである。すなわち「脳髄の中に、〈知覚されている対象〉の何らかの生理学的表現を置く必要(J285/F207)」があるというわけである。そしてこれは、「似而非デカルト主義」的な科学の暗黙の前提ともなっている。

しかし、メルロ・ポンティによれば、こうした図式には難点が存在する。『行動の構造』第二章第二節の内容を確認する形で、「知覚野」と「生理学的過程」の関係について次のように述べられている。

「身体の中に知覚の生理学的等価物を求めようとしても」、「感覚野の諸点に空間値ないし色彩値を配分し、そして例えば正常の場合〈複視〉[両眼の視覚の統合がうまくいかず、物が二重に見えること]が起こらないようにする神経活動というものそれ自身が、現象野や現象野の内的平衡の法則に関係づけられなければ考えられないものなのである(J286/

F207)」。

同様に、上でみた「知覚のパースペクティブ的構造」に関しても次のように書かれている。

「物の光景は射映を通して見られるのだという、この独自の構造は、何らかの实在の生理学的ないし心理学的過程によって〈説明〉されうるようなものではない。私が遠くの対象を見るとき、私は、写真の乾板が物体の像をうけとりうるといった具合に、一定の大きさの心像を眺めるわけではない(J289/F209-210)」と。

約言すれば、「現象野の諸特性は、それに何も負っていないような言語においては表現不可能である。…知覚的諸局面とそれがわれわれに表す物の関係は自然の内部に存在する関係には還元されない(J287/F208)」ということになる。つまり、神経活動によって知覚を定義することはできないし、また、物理的刺戟や神経活動を〈現象野における感覚〉の原因とみなすこともできない。というのは、この場合、説明されるはずの出来事〔現象野における出来事〕を使わなくては、説明するはずの出来事〔生理学的出来事〕を表現できないからである。こうして、もっと先のテキストではあるが、〈知覚の研究には脳の振る舞いの研究だけで十分であるというような見方〉に対して、次のような見解も提示されている。

「科学の研究対象となるような知覚的行動も、神経細胞やシナプスといった用語では定義されず、それは脳の〈なか〉にも身体の〈なか〉にさえも存在してはいないということである。科学といえども、外側から行動の〈中枢領域〉を、頭蓋骨の内に閉じ込められた何ものかとして外から組み立ててみせるわけにはいかなかった(J305/F221)」と。

さて、以上の論述の要点は、「知覚について生理学的分析」は「現象学的与件であるところの知覚野の構造」から独立には行われえないということであった。この論点はメルロ・ポンティの所論を支える礎石の一つであり、のちにも触れることになるが、この文脈では、「生理学的分析」に対する「現象学的与件」の優位を示して「批判主義」へわれわれを導く論点として提出されているのである。

以上は「似而非デカルト主義」とそれについてのメルロ・ポンティの見解であったが、デカルト自身は、知覚を「知覚の思惟」つまり「見たり触れたりすることの単なる思惟」として理解することにより、「批判主義」に途を開くことになった。もっとも、完成した「批判主義」から見れば、デカルトの所説には不徹底な点が存する。たとえば、「知覚において、自分が望まなくとも対象が《現前する》ということから、〈知覚的ないし想像的対象〉を觀念から区別する実在的特徴がある…」としたり、「私のものとしての私の身体の経験は精神と身体との実在的《混合》によって説明される」と主張したりする点である。

こうした不徹底が除去されることにより、カントにおいて「批判主義」は最高点に達する。すなわち、以下の言葉で表わされるように、〈精神〉と〈物〉の関係は、〈精神が物を意味的に構成する関係〉と解されることになるのである。

「事物が精神に作用する唯一の方法は、精神に意味を示すこと、精神に自らを示すこと、精神の前でその知的分節において自らを構成することである」と。

そしてこのような理解から、精神による意味的構成の分析をテーマとする「現象学」という学問が構想されることになる。

「認識作用の分析は、対象の特徴的構造を内的に基礎づけている構成的かつ産出的思考の理念にわれわれを導くのである。…われわれは諸対象を〈諸現象〉と呼ぶことができ、哲学は、それをテーマとするのにしたがって〈現象学〉となる。それは、世界の場としての意識の在庫調査ということである(J297/F215)」<sup>9)</sup>。

こうして、〈第三章結論部〉の「普遍的な場としての意識①」を要請する「批判主義」が完成し、この「意識」は「絶対的意識」とも呼ばれることになる。

けれども、「批判主義」にとって「意識」は「身体」との関連で上とは別な仕方でも出現する。まず、身体は「意識の前で構成される諸対象の一つとなり」、延長の一部として把握されることになる。そして、「意識」は一方では、上のような「世界の場としての意識」であるが、他方で、「意識」は、「世界を構成している諸関係の中に組み入れられるわけであり、世界の一部分としても現れる(J298/F216)」ということになる。こうした「意識」の二重の現れ方こそ、われわれの見た『行動の構造』の序文に記されていた初発の問題提起において指し示されていた事柄である。

最後に「心身の関係の問題」に関して見ておくと、この問題は首尾一貫した「批判主義」にとっては、もはや克服されてしまっていて、あまり意味をもたない。というのも〈心身の問題〉は、デカルトがいわばその不徹底のゆえに認めた「混乱した思考 *pensée confuse*」にとってしか意味を持たないからである。先にみたように、身体が延長の一部とみなされ、知覚は判断ないし思考とみなされるのだとすれば、身体的感覚とは〈誤って身体の内には存在するとされた錯覚のようなもの〉になってしまうからである。また、心的出来事も身体的出来事もいずれも「絶対的意識」によって構成されるものにすぎないのであるから、心身関係が問題になるとしても、その関係は、〈二系列の出来事の間を経験的に見いだされる相関関係〉だというだけのことになるわけである。

こうしてメルロ・ポンティは『行動の構造』第四章第一節で、「素朴的意識」から出発し、哲学の歴史を念頭におきつつ、「批判主義」の生成過程をたどってみせた。この過程の通りに「素朴的意識」が「絶対的意識」に変貌するということは、「絶対的意識」は「素朴的意識」の内容を完全に対象化するということを意味するであろう。その際身体は、純粹に生理学的観点からみられた身体と同様に単なる物体であり、「混乱した思考」にとってのみ問題になる「感覚する身体」や「心身の問題」はもはや意味を持たないのであった。そして、その場合には「行動と意識の内的連関」を見いだすという、同書におけるメルロ・ポンティの当初の

課題も挫折せざるをえないであろうし、「意識」の現れ方も二通りに分裂したままにとどまる。「絶対的意識」の身分の再考が必要となる所以である。

### §3 絶対的意識の問題性

「批判主義」に到達したのちの節である第四章第二節の表題は、【自然主義というものには一理もないのか】というものである。この表題は、「自然主義」を退けることの是非がただちに検討されるという予想を抱かせるものではあるが、メルロ・ポンティはその前に第一項【いかなる意味において以前の章は超越論的態度へ導くのか——意味の三つの秩序として定義された物質・生命・精神】において、なぜ「超越論的態度」が必要とされるのかを見きわめようとしている。その解答は、「物質・生命・精神」という〈意味の三つの秩序〉を正当に取り扱うためには「超越論的態度」が要求されるということである。そしてここでは「超越論的態度」は「考えられうる全実在を意識の対象として扱うような哲学(J300/F217)」のことと解されている。この限りでは、この項の主張は前項の主張と同じであるようにみえる。しかし、前後の項とこの項を比較してみると、この項は前項の主張の単なる反復ないし確認ではないということがわかる。前項との相違の第一点は、この項で「心身の問題」が再び考察されるけれども、その際に、「心」と「身体」の概念は『行動の構造』第二章で提示された「統合」ならびに「解体」という概念によって相対化されているということである。そして、第二点は、多少仮定的なニュアンスがあるにせよ「純粹主観」や「絶対的意識」の生成(J304/F220)ということが語られており<sup>(10)</sup>、それによって逆に、人間がそうした主観や意識ではない可能性も指し示されていることである。そしてメルロ・ポンティは、こうした考察を経て、次の第二項では「超越論的態度」の意味を考察し直している。「統合」の本性の考察は小論の後のセクションにゆずり、本セクションでは、上の二点を確認しておくことにしよう。

「超越論的態度」の立場からみると、「精神」の秩序よりも下位に属する「物質」と「生命」という二つの秩序の中に意味を認めるのは「意識」である。そこで、「意識」は「それら二つの秩序の可能性の条件ならびに基礎として現れる」。このように解された「意識」は以前に「普遍的な場としての意識①」ないし「絶対的意識」といわれていたものである。そして、この「意識」にとって、「心と身体の関係の問題」は消滅する、と言われている。この結論は前セクションと同じことであるが、その考察は「統合」の概念を使っていて、一步踏み込んだものである。

まず、「物理的なもの、生命的なもの、心的個体は統合度の違いにおいて区別されるだけである」と言われ、三つの秩序が「統合」という概念によって相対化されている。その上で、「心身の関係」について次のように論ぜられている。たとえば或る動作が自分の思うように

行われる際に、通常われわれは「心が身体に作用する」という言い方をすることがある。メルロ・ポンティは、このような言い方を、「身体の活動が生命の水準よりも高い水準に統合され、そして身体が真に〈人間の身体〉になったのだ」というように、「統合」という概念を使って解釈すべきだと主張する。同じことは、「自らの中に孤立的動作の系の活動する余地を残さないものであるかぎり、人間の心と身体とは、もはや区別されない (J302/F218)」とも表現されている。

逆にいえば、行動のある体系が全体から孤立している場合には、自分の思うままに行動が行われないことになり、「身体が心から区別されている」、あるいは、「身体が原因として心に作用する」という印象をもつことになる。実際、身体の或る部分が正常に機能している際には、思いのままに行動がなされるが、その部分が不調になったり怪我をしたりすると、われわれは多くの場合、その部分が原因で苦痛や不快を感じるといった印象をもつであろう。また、「不治の身体的特殊性も、それがわれわれの経験全体に統合されるならば、もはや、われわれの中で〈原因〉という資格をもつものではなくなる (J302/F218)」というように、或る孤立していた系が全体に統合される場合もある。

そして、〈認識的行為〉においてもこのように身体が「原因」であることをやめるのだとすれば、「人間が、真の認識に到達し、また〈生物あるいは社会的存在者と、その限られた環境との間の弁証法〉を乗り越え、世界を客観的に認識する純粹主観となることによって、ついには絶対的意識…の現実体となる (J303-4/220)」ような場合にも、そうした「絶対的意識」の生成は「統合」によることと考えられるであろう。

このように、身体のあり方と意識のあり方は相関関係になっており、身体が「原因」でなくなるのに相関的に、主観は「純粹」になると考えられる。だが、こうした関係は、人間には〈純粹主観ではない状態〉、〈心身の区別が存在する状態〉、つまり〈統合が不完全な状態〉が存するということをも指し示しているであろう。

以上のような〈身体〉と〈意識〉の図式が成り立つとすると、それらのあり方全体を支えているのは「統合」というプロセスだということになる。以下の各セクションで、このことをより詳細に見ていくことにする。

#### § 4 超越論的態度。「意識」の捉え直しの課題

以上では、「素朴的意識」から「批判主義」への途がたどられ、次に、「超越論的態度」からみた三つの秩序の関連が考察された。これは、〈第三章結論部〉の表現を使えば、「上級のもを下級のものから解放する」面ということができよう。そして、三つの秩序の関連と「心と身体の関係の問題」は「統合」という概念によって解釈されていたのである。



メルロ・ポンティは第四章第二節第二項【しかしわれわれの結論は批判主義的なものではない】において、「…因果的な考えについての批判的議論の結果、われわれは《超越論的態度》に到達した。この〈超越論的態度〉ということが、これまでの節から導かれる最初の結論であったわけである。がそれだけが唯一の結論ではないし、それどころか、この最初の結論は、批判主義的発想の哲学とは、単なる〈同音異義〉の関係にあるとさえ言うべきであろう(J307/F222-3)」と述べている。

ここでは「超越論的態度」と「批判主義的発想の哲学」は異なると明言されている。前者に関してはE.フィンクの「自然的態度」ならびに「超越論的態度への移行」についての注が、後者については、それが「ブランシュヴィックの哲学のようなもの」であるという注がつけられている。そして、「批判主義」については、「自我意識を育て上げてきた〈歴史〉でさえも、自分が自分に与える一つの光景にすぎない」ことになり、「さまざまな出来事の系列は、意識の永遠性に従属することになる(J307/F222)」と言われている。

このようにみると、「批判主義」的見解とメルロ・ポンティの見解の相違は、前者が意識の生成を無視し、「絶対的意識」を「意識」の不変の有り方と考えるのに対して、彼は、「意識」を生成や解体も含めて考察しようとするという点にあると思われる。そのことは、「意識には、意識自身の歴史と、自らが越えてきた弁証法の初段階が現前している(J309/F225)」という言葉や同趣旨のヘーゲルからの引用によって確かめられるであろう<sup>(11)</sup>。

メルロ・ポンティは、そのような理由から、この第二節第二項において、『行動の構造』第一章から第三章でなされた、意識の生成と関連する生理学的考察を振り返っていると思われる。このことによって、「意識」だけでなく「真理の意識」の生成、さらにそれを前提として成り立つところの「絶対的意識」の生成の有り様も示され、またそれと同時に「批判主義」の限界が示されると予想される。この項の表題は、【しかしわれわれの結論は批判主義的なものではない】というものだったのである。メルロ・ポンティが「意識」の生成を『行動の構造』の中でどのように考えていたか、「統合」との関連で追ってみよう。

上の「同音異義の関係」という語に続いて第二章の回顧がはじまる箇所において、「われわれの[研究の]出発点となった〈ゲシュタルト〉というものの中で深い意味をもっているのは、意味という観念よりもむしろ、構造という観念である(J307/F223)」と言われている。このように「意味」と「構造」が対比された上で、「構造」という語は、「理念と実在の不可分の結合、それによって素材がわれわれの前で意味をもちはじめの偶然的な配置、生まれ出ずる状態における可知性」と言いかえられている。『行動の構造』における「構造」の概念は、「意識」の概念におとらず多義的である<sup>(12)</sup>が、ここで述べられている〈理念と実在、素材と意味を媒介するもの〉としての「構造」は、具体的にはどのようなことを指しているのだろうか。

上の言葉の少しあとでメルロ・ポンティは、第一章における〈反射的行動〉の研究の成果をふりかえって、「神経系が機能する場合、その全体的活動に結びつかないような[神経系の]領域はなく、しかしまた、そうした領域のただ一箇所でも除去されたばあい根本的に変化を受けない機能というものもなかった。そして機能とは、神経全体に支えられていて、各瞬間に描かれ、自己自身を組織化する過程以外の何ものでもなかったのである(J307-8/F223)」と言っている。第一章の成果の中心的事象は神経系における「機能と領域の関係」に関することだったのである。

それに引き続いてメルロ・ポンティは、【行動の《中枢領域》と機能局在の問題】と題されていた第二章第二節の内容を総括して、次のように書いている。

「われわれは二つのタイプの機能局在というよりも、《水平の》局在と《垂直の》局在との解ききたい交叉(entre-croisement)にかかわっていたわけであって、身体は、何処においても純粋の物ではないが、また何処においても純粋の観念でもなかったのである(F223/J308)」と。

この言葉の前半では、先ほどと同様に〈機能と領域(局在)の関係〉について語られており、後半では、身体が「純粋の物体」もしくは「純粋の観念」であるという一面的な見方が斥けられている。そして、前半と後半が同じ事柄ないしは極めて密接に関連する事柄を述べており、先にみたことから「構造」とは身体の観念性と物体性とを媒介するものであるということとを勘案すると、われわれは、「構造」を具体化しているのは意味と素材とを媒介する〈機能と領域の関係〉といった事柄であると考えることができるであろう。

そこで、次のセクションでは、先に言及された〈垂直の局在〉と〈水平の局在〉という事柄を手がかりにして〈機能と領域との関係〉として具体化される「構造」について、『行動の構造』の第二章第二節の要点をみることにしよう。そのことを通して「統合」の本性的も明らかになることが期待される。

## §5 〈水平の局在と垂直の局在の交叉〉と統合

例えば、大脳の或る箇所の損傷ののちに、ゲルプとゴルトシュタインによって名づけられた「範疇的態度」(或る観点から諸事物を分類する能力)といった「基本的機能」の障碍の症例がみられる。そうした事例の紹介のあとで、大脳の「中枢領域」について、以下のように説明されている。

「この中枢領域の活動は、その一つ一つが空間内の一運動に対応する特定の機構の賦活としてではなく、質料的に異なる諸運動に同じ類型的形式、同じ価値的述語、同じ意味を与えうるような全体的活動として理解されうるのである(J119/F79)」と。

また、「損傷」についても以下のように言われる。

「皮質の中枢領域の損傷が観察されたような諸結果を生ずるのも、それがしかじかの細胞、しかじかの接続を破壊するというかぎりにおいてではなく、しかじかの型の活動、しかじかの水準の伝導をおかすかぎりにおいてである。損傷の位置や発生の仕方がどうであれ、そこでは機能の系統的解体(désintégration)が観察されるであろう(J119/F80)」。この局在が「垂直の局在」と呼ばれるものであり、要約すれば、〈一定の活動の型や機能が脳皮質の中枢領域に局在する〉ということが「垂直の局在」だということになる。

他方、「水平の局在」は以下のように説明されている。

「感覚によって受容された情報を大脳に伝えたり、種々の筋肉に適当な興奮を配分する伝導体の水準では、神経組織の各部分が《有機体と外界の一定部分とのあいだの関係》を確保するという役割をもつことは明らかである。神経実質の各点や、そこに生ずる諸現象には、感覚表面ないし筋肉の一点や、外界の一刺戟ないし空間内の一運動、少なくとも身体の運動の一要素が対応する(J119/F80)」。

すなわち、神経組織のうちの感覚器官や運動器官に近い部分では、それらの器官の空間的広がりに対応するような役割が各部分に位置づけられており、それが「水平の局在」とよばれている。両者をまとめて言えば、「水平の局在」は脳においては比較的周辺部に位置するが、他方、知覚や運動の諸「機能」に関する「垂直の局在」がみられるのは大脳皮質の中枢領域においてである、ということになる。

ただし、次の注意にみられるように、これらの二種の局在は相互に無関係に存するわけではない。

「…《水平の局在》と定義される視覚領の内部に、従属的な《垂直の局在》を認めなくてはならない。…受容器の表面に散在する局所的興奮は、皮質の特定の中枢に入るや否や一連の構造化(structuration)をうけ、現実にはまりこんでいた出来事の空間的—時間的文脈から分離して、有機的で人間的な活動の独自の次元に応じて秩序づけられるのである(J120/F81)」。

例えば、小論§2でも見た事柄であるが、視覚野の中の諸物の位置に関しては、網膜上の位置のみにより〈視覚野の中の位置づけ〉が決まるのではなくて、たとえば両眼の視野におけるずれ、身体運動と視覚と関連、また、色彩との関連など無数の影響のもとで、それぞれの位置は構造化されるわけである。こうしたことを大脳の組織の面で実現しているのが、両方の局在の「交叉」ということなのである。ここで「構造化」と呼ばれている事柄が「統合 intégration」（ないし「組織化 organisation」）とよばれていたことに他ならない(J124/F84)。なお、「統合」という用語の方が「構造化」よりも具体性をもっており、『行動の構造』の前半部ではその用語でこの事象の説明がなされているので、小論では、これ以降もおもに「統合」という

用語を使うこととする。

古典的な反射理論や生理学では、有機体を扱うときに暗黙のうちに、〈個々の場合に完全に活動の仕方が定まっている機械〉とみなし、そこには「統制」装置がそなわると想定してきたが、メルロ・ポンティは『行動の構造』第二章において、こうした「統制」の概念に対して「統合」の概念を対置していたのである。第二章では「統合」の幾つかの事例が扱われているが、総括的に述べられている箇所がある。そこで、その箇所を参考にしつつ、「統合」の本性を考察し、どのように「統合」が、前に見た〈三つの秩序の連関〉や〈心身の関係の問題〉、そして〈意識の生成〉と関わるのかを考えていくことにしよう。

「要するに単語の了解の場合であれ、色ないし空間的位置の知覚の場合であれ、神経活動を、刺戟の客観的特性によって外から発動される既定装置の活動と考えるわけにはいかない。知覚された色ないし位置、語の意味に対応する生理的過程は、知覚のその瞬間に、臨機応変に行われ、また能動的に構成されるのでなくてはならない。それゆえ、機能は積極的な、それ自身の実在性をもつのであって、諸器官ないし基体が存在するということからの単なる帰結ではない。興奮の過程は不可分の統一を形づくるのであり、局所的過程の総和から成るのではない。網膜のしかじかの興奮に続いて実際に知覚される色ないし位置は、単にその興奮の特性にばかりではなく、神経活動の固有の法則に依存する。…神経系の生きた生理学は、現象となって与えられているものから出発することによってしか、認識されえないのである(J139-40/F97)。

この論述に即して、「統合」の特徴をまとめると次のようになる。

- (1) 統合の過程は「その瞬間に、臨機応変に行われ、また能動的に構成される」。
- (2) 統合の際に「遂行される機能は積極的な、それ自身の実在性をもつ」。

このことは、ゲシュタルト心理学において強調される「全体は部分に還元されない」という内容であり、次のようにも表現されている。

「諸要素が単に連結されるだけでなく、結合されることによって、一つのそれ自身の法則をもつ全体を作り上げる(J138/F96)」。

なお、「要素」に関して補足すれば、有機体の活動については何を「要素」と考えるべきかを決定的に定めることはできないと思われる。有機体の活動は、どのような活動も全体と関係するので、統合ないし統合の一要素とみなすことが可能であろう。

- (3) 統合は、「現象となっているものから出発することによってしか、認識されない」。

これは、分析に関して言えば、前に見た〈生理学的分析に対する現象学的分析の優位〉のことである。

以上のように特徴づけられる「統合」は、一つの知覚様相の内部のみならず、視覚と触覚の機能、視覚と聴覚の機能、また知覚と運動の機能、知覚と言語の機能などいたるところに

見いだされるであろう。たとえば、運動の機能が知覚の機能と協働しなければ、環境内での適切な行動は不可能である。また、小論ととくに関係の深い「パースペクティヴ」に関していえば、空間の認知には身体行動との関連が潜在的に含まれていたり、さまざまなパースペクティヴが組織化されて一つの空間認識が可能になっているのであるから、これも「統合」の所産とみることができ（J141-2/F98-9）<sup>(13)</sup>。

## §6 統合・弁証法・意識

小論の§3で見たところでは、「統合」と「弁証法」は密接に関連していた。そして、「意識」は一つの「弁証法」であった。これらの点についてももう少し詳しく見ることによって、意識の生成、そして意識諸概念の間の関係を見定めよう。

「高等な行動は物理的系と局所解剖学的諸条件との弁証法を初め、有機体と《環境》との弁証法に至るまで、さまざまな従属的弁証法を、自らの存在の深層に保持している。全体が正しく機能しているときには、従属的弁証法を全体の中から識別することはできないが、しかし部分的障害のばあいに全体の統合が解体することによってそれらの内在していることが証言されるのである（J308-9/F224）」。

ここでは、下級の弁証法と上級の弁証法との関係も「統合」ないし「解体」によって表現されている。そこで、〈第三章結論部〉にみられた「従属的諸弁証法に根ざした意識」という表現の中の〈意識〉と〈従属する諸弁証法〉の関係も、後者に基づいて成立する「統合」が「意識」であるという関係とみることができであろう。つまり、統合によって成立している弁証法としての〈人間と環境のかかわり〉が「意識」として把握されているのである。それゆえ、例えば、「生きられた意識」の記述において、フットボール選手について、「意識とは、この瞬間、環境と行為との弁証法以外の何ものでもない（J250/F183）」という言葉も見いだされたのである。

また、メルロ・ポンティは次のように、「心と身体の関係」をも弁証法の間関係と捉えていた。

「交互に作用し合う科学的構成要素の塊としての身体が存在するし、生物と生物学的環境との弁証法としての身体がある……。これら諸段階の一つ一つは、前段階のものに対しては心であり、次の段階のものに対して身体である。身体一般とは、…すでに形成された能力の全体、つねにより高級な形態化の行われるべき既得の弁証法的地盤であり、そして心とはそのとき確立される意味のことである（J311-2/F227）」。

このような把握から、前にみたように、「身体二元性は実体の二元性ではない。心と身体観念は相対化されるべきである（J311/F227）」ということになるが、その理由は結局、「諸弁



証法（秩序）」の間の関係が「統合」によって成り立っているということなのである。

ただし、先にも見られたように、常に統合が成立しているとは限らない。「統合化が行われていない場合には、心と身体は明らかに区別され、そしてそこに二元論の真理がある」ことになる。けれどもまた、「心と身体という二つの関係項が絶対的に区別されるということは存在することをやめないかぎり、けっしてあり得ないことである…」。結局のところ、「根源的実在としてのこの〈構造〉に立ちかえることによって、われわれは心身の区別と統一とを、同時に把握しうようになる(J311/F226)」のである。

小論§1および§2で見た意識概念について振り返ってみると、「生きられる意識⑧」（「素朴的意識」）と「真理の意識⑤」が「人間的意識」の契機となっており、「真理の意識」の延長上に「絶対的意識」つまり「普遍的な場としての意識①」がある、というように位置づけられよう。「真理の意識」については、それが「諸パースペクティブの統合」を前提として成立することを考えれば、それは、「生きられる意識」に基づく「統合」による所産とみてよいであろう。さらに、脳における「垂直の局在」に対応する「範疇的態度」が「真理の意識」を支えていることなども顧慮すれば、「真理の意識」と「統合」との密接な関連を認めることができるであろう。そして、「絶対的意識」や「批判主義」は「真理の意識」を基盤とせざるをえない以上、それらも「統合」の所産なのである。そして、言うまでもなく、「絶対的意識」といっても常に「解体」の危機にさらされており、完全な形で実現される保証はないのである。

こうしてみると、「上級のものを下級のものから解放すると同時に、上級のものを下級のものに《基づける》という」分析の二つの面は「統合」（ないし「構造化」）という事柄の二つの側面だということができるであろう。「統合」においては、下級のものに基づくことによって上級のものが可能になっているからである。

さて、以上の「統合」ないし「組織化」による「機能」には、生理学的に見た場合の脳や神経系における「水平の局在と垂直の局在の交叉」が対応しているのであった。脳とその機能との対応については総括的につぎのように言われている。

「もし、細胞や伝導体の一団を「脳」と呼ぶとすれば、高等な行動はその意味での脳の中に含まれているのではなく、機能的存在としての脳にのみ属するであろう。もし空間を相互外的な多数の諸部分と解するなら、高等な行動は空間の中にはないであろう。われわれは常に脳を、同質的諸部分の相互外在性によって定義される空間の中で考察することができる。けれども脳の生理学的事象は、この空間内では表されえないことを知らなくてはならない(J119/F79-80)」。

つまり、われわれは、〈脳の諸機能〉が脳の中で空間的延長という形で実現されているのを観察するわけにはいかない。機能や二つの局在の「交叉」自体は、現象野や行動における

秩序や障碍という形でしかみられないのである。

ところでわれわれは、この論点は§2においては批判主義的立場へ導くものであることを見た。では、〈意識を根底にすえる考え方〉と、〈意識は脳の活動を基盤としているという見方〉の関係をどのように理解すべきであろうか。メルロ・ポンティはそれを知覚の「現象」の場面で明らかにしようとしている。つまり、「知覚的経験」の骨格をなす「パースペクティヴ性」の中に意識の二義性を位置づけ、そして最後に、その観点から〈意識〉と〈脳を含む身体〉の関係を捉えなおして『行動の構造』を結んでいるのである。

### §7 〈パースペクティヴ的知覚の意識〉と〈意味の意識〉

小論§2における「素朴的意識」の説明に際してみておいた事柄であるが、立方体を見る場合、六つの面が同時に見えているのではないが、われわれはその立方体が六つの面を持つものとして知覚している。そこでわれわれは、〈一定のパースペクティヴからの見ている意識〉と〈立方体の意味や構造の理解の意識〉を二つの契機として区別することができる。ただし知覚においては、さまざまな局面、パースペクティヴをとおして立方体を知覚しているわけであり、立方体の意味はその知覚に「受肉」しているのである。

『行動の構造』第四章第二節第三項【体験の流れとしての意識と意味の場としての意識】では、上の二つの意識はこの表題の用語をはじめとして様々な対比的な用語を使ってなされているが、ここでは、「生きられたパースペクティヴ的知覚の意識」と「意味の意識」と表現しておこう。ここでメルロ・ポンティが「意味」という用語を使っているのは、相互主観的に了解できる内容のことを表現しているのであり、「意味の意識」はまた、「世界の知的な意識」とも表記されている。なお、ここで述べられている意識の二義性は、小論§1でみた「生きられる意識⑧」と「真理の意識⑤」という「意識」の区分とほぼ重なると思われる。

それでは、〈自己の身体〉はどのように現れているのであろうか。自己の身体も立方体の知覚のように全面的に現れることがなく、パースペクティヴ的な現れ方をする。しかも、「私は直接に自分の目を見ることはない…」。「私の網膜は、私にとっては絶対に不可知なものなのである」。いわば、網膜は自分の絶対的な盲点なのである。けれども、外的事物の知覚において「世界の知的な意識」が存在したように、自分の身体についても、網膜や脳についての知識が（程度はともかく）存在するのである。そして、この知識は、立方体の場合と同様に、相互主観的な知識であり、私には顕在的には見えない身体的部分でもほかの人には見える可能性があるわけである。

そこで、われわれの知覚的意識には、「自らのあずかり知らないいわば大脳の段階があり」、そして、「神経活動の意味はその意味の中には姿を現さない〈有機的支点〉をもっていること

になる(J323/233-4)」。そうした大脳の段階に関する知は相互主観的な知であることに注意すれば、この事実は次のように解釈される。「私の意識野に或る感覚的現象が実現されるならば、その度に、適当な位置にいる観察者は、私の大脳の中に、私自身には現実性という形では与えられないような或る別の現象を見うるであろう(J323/F324)」。

そして、観察者は、「私の知覚内容と符合するような意味をその現象に認めようとし」、私のほうは「逆に、自分に与えられている現実の光景にもとづいて、潜在的な形で、すなわち純粋な意味として、ある種の網膜現象や大脳現象を思い浮かべ、それを私の潜在的な身体像の中に定位することができるわけである(J323/F234)」と。すなわち、私と観察者との間で、〈顕在的に与えられる現象〉と〈潜在的ないし意味的にしか目指されない現象〉の「意味の交錯 *entrelacement* (J323/F234)」が生じているわけである。

そして、§5でみた「水平の局在と垂直の局在の交叉」は、それを確認するためには知覚者の〈知覚野の有様〉を参照せざるをえないということを考慮すれば、ここでの「交錯」と同じ事柄を表現しているのである。ただし、「交叉」の場合には、知覚者と観察者のパースペクティブの相違の含意が、ここでの「交錯」のように明記されてはいなかったのである。

「交錯」をなしているそれぞれの項の関係をみておこう。知覚者の〈知覚野の有様〉と〈脳の状態〉は、前者なしには後者の意味を把握できず、後者の意味を前者が表しているという関係にあるので、脳の状態が知覚野の有様の「原因」であるとはいえない。また、〈外的事物〉と〈知覚者の網膜上に写るその像〉との関係も、〈その像はまさしく知覚者の運動によって網膜上に写っている〉という関係をも含んでいるために、一方的に外的事物がその像の原因であるとはいえない。(こうした関係をメルロ・ポンティは「循環的因果関係」と呼んでいた)。外的事物による神経系への「作用」についても同様のことが成り立つ。それゆえメルロ・ポンティは次のように述べている。

「外的知覚の存在、私の身体が存在、そしてこの身体の中に私には知覚しえない現象が存在することは厳密に同義なのである。それらの中に因果の関係はない。それらは符合する現象(*phénomènes concordants*)だ、というだけである(J324/F234)」。

さて、批判主義における「意識」の現れ方として触れておいたことであるが、意識と自然に関しては次のような「矛盾 *contradiction*」があった。つまり、「一方では意識は身体の機能であり、したがってそれはある種の外的出来事に依存するような「内的」出来事であるが、他方ではそれら外的出来事そのものは意識によってしか認識されない(J321/F232)」という矛盾である。

だが今までの考察からすれば、この「矛盾」は、知覚の中に含まれている二つの契機の一つのみを絶対視したときに生じるものにすぎない。その契機とは、一方は「客観的意味(世界の構造)」であり、他方は、「(主観的な)体験としてのパースペクティブ的な知覚」である。

知覚はそのような〈二義性〉をはらんでいるのである。

つまり、知覚における事物や世界の現象を、世界についての〈客観的な知や意味〉のみに、また逆に、〈意味を欠いたパースペクティブ的現れ〉のみに還元することはできないのである。それゆえ、この前半に注目すれば、統合や歴史といった事実を完全に乗り越える形で「絶対的意識」を実現することは不可能であるということになる。

\* \* \*

知覚のパースペクティブ性とそこに含まれる意識の二義性。〈見える光景〉と〈自分の身体の不可視の部分〉、それをめぐる交錯。脳や神経系における水平の局在と垂直の局在の交叉。そして、物理的秩序と生命的秩序と意識の秩序。心身の区別と同一性。これらはみな「統合」（「構造化」）と「解体」の契機と考えられるべき事柄であった。

こうした二義性が消滅することはない、というのが『行動の構造』の結論であるように思われる。

知覚的意識は脳や神経系を含む身体的基盤をもつ。しかし、知覚的意識はその基盤に解消されるわけではない。その「基盤」を「知覚的意識」の原因とはみなしえないし、それによって知覚を再構成したりできるわけではない。身体が「統合」という形で機能することによって、知覚的意識は成立しているのである。第三章結論部の言葉にあったように、分析にとっては、「上級のものを下級のものから解放すること」が同時に「上級のものを下級のものに基づけること」なのである。

『行動の構造』最終頁の параグラフは【構造と意味。知覚的意識の問題】と題されている。そこには、批判主義を斥けなければならないのだとすれば、「現実的なものの現象をも統合する新たな超越論的哲学を定義することが必要である」という言葉が見られる。この「新しい超越論的哲学」とはどのような哲学を指しているのだろうか。

また、以上の考察の中でみてきたように、『行動の構造』は、生理学的研究ならびに現象学的研究の重要性を示唆するとともに、それらの関係を考えて個別的研究の全体的見取り図を得るための重要な手がかりをあたえてくれるものであるということができよう。

だが、これらについては、改めて考察する必要がある。「統合」ということが『行動の構造』の中軸に位置するのを見定めたことで筆をおくことにしよう。

#### 注

(1) Maurice Merleau-Ponty, "La structure du comportement", puf., 1942.

邦訳『行動の構造』、みすず書房、滝浦静雄・木田元訳、昭和39年。同書からの引用の際に、その文ない

し語句の最後に(J\*\*/F\*\*)という形で、それぞれ邦訳と仏語原文の頁を示す。「章」、「節」の区切りは、すべて邦訳にしたがった。「節」以下の区切りは邦訳では漢数字のみで示されているが、便宜的に「項」と表記した。それらの表題を記すときには【 】で囲むこととした。なお、文脈などの関係で訳語は若干異なる箇所もある。また、引用における下線は小論の著者、イタリックは原文によるものである。

(2) M.Merleau-Ponty, “Phénoménologie de la perception”, Gallimard, 1945.

(3) M.Merleau-Ponty, “Le visible et l’invisible”, Gallimard, 1964.

(4) 例えば、以下の論考を参照。

Evan Thompson et al., “Perceptual Completion: A Case Study in Phenomenology and Cognitive Science”, in: “Naturalizing Phenomenology”, Stanford University Press, 1999.

(5) 以後、この箇所を「第三章結論部」と呼ぶこととする。

(6) 以下、同書に登場するさまざまな「意識」の概念を整理するために、小論§1において、「意識」を表す主要な用語に番号をつけることとする。これら全体は§1の末尾で整理される。

(7) またフロイト理論の「コンプレックス」も、「統合」と逆の過程である「解体 désintégration」という概念によって解釈されている。さらに、フロイトの理論との関連で、「自らのあらゆる契機のなかに唯一の意味を持つとは限らないような〈意識の断片的生〉の可能性(J265/F193)」が語られている。この可能性を認めることは意識の考察にとって重要なことであろう。

(8) この用語は308頁 (F224) や310頁 (F226) においても使用されている。その箇所も参照されたい。

(9) ここで「現象学」という語が使われているが、文脈から考えて、この語は「批判主義」の内容の説明のために使われている。フッサールの「現象学」についての明確な評価は『行動の構造』では提示されていないように思われる。

(10) このことについては§6と§7の末尾を参照。

(11) 『行動の構造』の中でのメルロ・ポンティの「超越論的態度」や「超越論的意識」の概念や評価については、こうした言葉以外にはあまり手がかりがない。「批判主義」の評価については、331頁をも参照。

(12) ヴァルデンフェルス (B.Waldenfels) は、『行動の構造』のドイツ語訳の序文の中で、同書での「構造」の概念が表す内容を以下のように三つに分けている。

①或る刺戟形態(ゲシタルト)へと結合され、環境世界から浮かびあがる多くの刺戟の間の内的関連；②或る運動形態へと統一され、活動の全体から際立ってくる運動の諸契機の間内的関連；③同じ構造に参与する環境世界と有機体との間の、つまり刺戟の諸構造と反応の諸構造の間内的関連。のちに見るようにここで問題になる「構造」は、知覚野内の様々な配置にも身体の活動にも関わる事柄なので、この分類の③に属するものと考えられる。

cf. Vorwort von Übersetzers, S. XIII, in “Der Struktur des Verhaltens”, de Gruyter, 1976.

(13) 視覚野における位置づけのような場合、それぞれの興奮の場所が相互に関係づけられることになるので、古典的反射理論において個々の興奮の場所に属すると想定された反射弓が「縦の現象」と呼ばれるのとは対比的に、そのような連関は「横の現象」と呼ばれる。



# On the ambiguity of ‘consciousness’ and the integration in Merleau-Ponty’s “The Structure of Behavior”

Masahisa OGUMA

In Merleau-Ponty’s “The Structure of Behavior”, the word ‘consciousness’ is used in various meanings according to contexts. But generally ‘consciousness’ is divided into four different types of acts of consciousness.

1 : lived consciousness in the perception.

2 : consciousness of truth (i.e. representative consciousness).

3 : consciousness as a network of significative intentions.

4 : consciousness as universal milieu (i.e. absolute consciousness in ‘the critical idealism’).

According to Merleau-Ponty these types are different orders of dialectics of human beings. And he poses the following question in “The Structure of Behavior”. ‘What is the relation between consciousness as universal milieu and consciousness enrooted in the subordinated dialectics?’

The aim of this paper is to clarify the relations of these types of consciousness. These relations have not been clearly determined in the studies concerning Merleau-Ponty’s philosophy. According to me, these relations can be explained by the concept of integration (or structuration). The process of integration is closely related to the localizations in the nervous system. And the explication of the function of integration elucidates also Merleau-Ponty’s thought on the relation of the Soul and the Body.